

「愛憐詩篇」について

朔太郎が『純情小曲集』（大正一四年）の「自序」において、「愛憐詩篇」は「すべて私の少年時代の作」と語ったことについて、三好達治の『萩原朔太郎』（一九六三年、筑摩書房）における指摘以後、それを自己確立以前の作として甘く見くびったとする見解があり、拙著第四章においてそれに対する反駁を詳細に展開したが、ここでは、それを補強するための論拠をいくつか提出しておきたい。

朔太郎が、発表当時から「愛憐詩篇」を「大変気に入って」「大変得意であつたらしい」ことが、久保忠夫の「朔太郎とウイスキー」（『浅間嶺』一九五七年一月）に記述されている。（『萩原朔太郎論』上、一二六頁、一九九九年、塙書房）

また地元の人誌『侏儒』大正四年二月号に掲載された、「ノート二」記載の草稿には「——侏儒の諸君に——」という付記のある、朔太郎の「南の海へ行きます」と題する作品に、

あしたはれいの背広を着、  
いつもの軽い靴をはき、

まだ見も知らぬ南の海へあそばさうよ

という部分が見える。（『全集』第二二巻、一〇四頁）これは「愛憐詩篇」の「旅上」に、

せめては新しき背広をきて  
きまゝなる旅にいでもみん（同、第二巻、一六頁）

というフレーズがあるのを本歌として制作されたものであると考えられる。<sup>(1)</sup>このことと、草稿における「——侏儒の諸君に——」という付記を合わせて考えれば、当時朔太郎の周囲に集まった『侏儒』の同人たちの間では、「れいの背広」というだけで十分にピンと来るほどに「旅上」が日常的に愛吟されており、朔太郎もそれを承知していたということになる。

回想のモチーフ

坂根俊英<sup>(2)</sup>は「萩原朔太郎「愛憐詩篇」論（二）」（『尾道短期大学研究紀要』一九八五年三月）において、「利根川のほとり」について、「この詩は朔太郎自身の少年時代の実体験に基づいていると思われる」として、明治四五年五月一七日付の津久井幸子宛「書簡」を引用している。

すでに前橋中学校を卒業して六年経った明治四五年を「少年

渡辺和靖  
愛知教育大学教授

時代」と表現するのにはいささか問題が残るが、「利根川のほとり」が回想をモチーフにしたものであるとする理解は、「愛憐詩篇」の性格を考えるうえで注目に値する。<sup>(4)</sup>

山本洋は『純情小曲集』評釈(六)、『龍谷大学論集』一九九二年六月)において、「愛憐詩篇」を朔太郎とエレナとの恋愛を背景として解説するという「恋人後景論」と称する独自の立場から、「利根川のほとり」についてつぎのように解釈している。

萩原朔太郎は、馬場仲子との恋愛の実りえないこと、そして決定的な訣別が宣せられたことによつて、どれだけの精神的打撃を受けたことか計りしれない。きのうもきょうも、いやそれ以前にもいくどとなく利根川に身を投げて死にたいという思いに駆られたことか。馬場仲子との恋愛を終局的に失つて、朔太郎には自分の生存理由がまったくないと思われたのである。(四三頁)

しかし、山本の言う「決定的な訣別」とはなにを意味するのであろうか。「利根川のほとり」は『創作』大正二年八月号に掲載されたが、『朱欒』の廃刊によつて白秋に送られた原稿が宙に浮いて公表が遅れたのであり、制作されたのは、人妻との夜汽車の逃避行を歌う「みちゆき」(『朱欒』大正二年五月)とほぼ同時期であると推定される。つまり山本は、この逃避行の直後に、二人の間に決定的な訣別があったというのであろうか。その根拠はどこにあるのか。また、それは「破局」と呼ばれる大正三年一月七日の決定的な事件とはどのような関係にあると云うのであろうか。山本の見解は極めて曖昧であり、根拠薄弱である。

山本洋は、また『純情小曲集』評釈(二)、『文林』一九八二年(二月)において、「愛憐詩篇」の「桜」について、「この詩の制作を大正二年四月、作者の数え年二十八歳のときとすれば、やはりその感傷過多の臆面もない表出には不審の感さえいだか

される」と疑問を呈し、「桜」の制作時期はほとんど動かしえない」と論定したうえで、「年をくおうが、放蕩生活を重ねようが、そんなことにかかわらず、作者の胸奥には純粋純情さがそこなわれず内包されて保持されていたとみとめなければならぬ」と結論している。(一三五頁)しかし、この作品が、白秋の『思ひ出』を媒介として、少年時代の思い出を歌つたものと考えられるならば、山本の疑問もいくらかは氷解するのではあるまいか。

同じく山本は『純情小曲集』評釈(三)、『女子大國文』一九八五年(二月)において、「愛憐詩篇」の「旅上」について、この作品の「音調のよさ、さわやかさ、明るい希望感」の背後に「幸福な時間の追憶」というモチーフがかくされていると指摘している。「旅上」のモチーフが過去の回想であると示唆する点では興味深い。その「もつとも明るい幸福な時間としていつも思い出されるのは」「明治三十七年から大正三年頃まで」の間に決行されたはずの「夜汽車」による「みちゆき」であったとする山本の推定は首肯しがたい。(四六、五一頁)

「みちゆき」は「少年時代」にかかわる少女への思いを、人妻となった現在のうえに重ねあわせ、さらに、第五高等学校(熊本)や第六高等学校(岡山)と故郷をしばしば往復した高校時代の汽車の旅の記憶をからませて制作されたものと考えられる。

また、ここに北原白秋の『桐の花』に歌われた、人妻との恋のテーマも参照されていたことを指摘したい。例えば「みちゆき」の、

ふと二人悲しさに身をすりよせ

という一行には、「ひとのよのつねの恋となあはれおもひたまひそ」という詞書を付した、

雪の夜の紅きゐるりにすり寄りつ人妻とわれと何とすべけ

む

という作品などが影を落としていないだろうか。『桐の花』のそのすぐ後に、「悪夢のあとの朝明」と詞書して、

狂ほしき夜は明けにけり浅みどりキヤベツ畑に雪はふりつ

という作品がつづいていられるのも注目される。これが「みちゆき」の原型となった朔太郎の「なにか知らねど」（『上毛新聞』大正二年九月三〇日）に見える、

きやべつ畑に日は光り

という一行に影を落としていることはすでに拙著において指摘したところである。

### 「緑陰」について

「（一九一三、五、鎌倉ニテ）」の日付をもつ「飲魚夜曲」や「（一九一三、五）」の日付をもつ「月見草」などの作品が、大正二年五月一〇日から一四日にかけての妹ユキをともなったエレナを訪ねる鎌倉行を契機として制作されたことは拙著において明らかにしたが、この鎌倉行を契機として制作されたと推定される作品はほかにもある。

『創作』大正二年九月号に掲載された「緑陰」は、「習作集第八巻」では末尾に「（二十四、五、一九一三）」という日付があり、この鎌倉行を契機として制作されたものと考えることができる。

あづまやの籐椅子とすによりて二人何を語らむ

（中略）

よきひとの側へにありて何を語らむ。（『全集』第二巻、二二頁）と恋人との語らいを歌う「緑陰」が、朔太郎とエレナの再会を描写したものであるとする解釈がある。しかし「緑陰」は、け

つして、現実の出会いを基にして制作されたものではない。

言葉なくふたりさしより

涙ぐましき露台の椅子にうち向ふ（『全集』第三巻、四一頁）と、恋人との交歓を虚構のうちに大胆に歌いあげた「飲魚夜曲」のように、「緑陰」に描かれた恋人との交歓も虚構のものであると判断される。

拙著第五章において「飲魚夜曲」の草稿として引いた「渚」と題する制作年次不明の未定稿は、「緑陰」との類縁を指摘することができる。先に引いた「緑陰」の、「あづまやの籐椅子によりて二人何を語らむ」あるいは、「よきひとの側へにありて何を語らむ」という言い回しは、「渚」の、

われ等なにごとか語らむと思ふなり（『全集』第三巻、五〇七頁）

という言い回しと共通している。また「緑陰」の、

君やわれや

すゞしくも二人の涙は流れ出でにけり。（前掲、二二頁）

という部分は、「渚」の

愛なくしてときのすぎゆくわびしさは

この言葉なきかたらひのひまに（前掲、五〇七頁）

という部分と、恋人と肩を並べながらも孤独の思いをぬぐい去ることのできないという構図において共通している。

思うに「緑陰」もまた、「渚」と同じように、孤独で惨めな現実のうえに幻影の恋人を配置するという虚構において生み出された「飲魚夜曲」成立の過程で制作された作品と見られる。

### 「ありや二曲」について

大正二年一〇月五日の『上毛新聞』に掲載された「ありや二曲」も、「習作集第八巻」で見ると、前後にいずれも大正二年

五月一九日の日付をもつ「成長」と「ふるさと」が配列されており、同じく五月一九日の作と推定される。つまり「ありや二曲」もエレナを訪ねる鎌倉の旅を契機として制作されたものと考えることができる。

えこそ忘れめや

そのくちづけのあとやさき

流るゝ水をせき止めし

わかれの際の青き月の出

雨落ち来らんとして

沖につばなの花咲き

海月は渚にきて青く光れり

砂丘に登りて遠きを望む

いま我が身の上に

好しと思ふことのありけり(『全集』第三卷、三四頁)

この作品は、「沖」「海月」「渚」「砂丘」など、背景に海のあることを暗示し、「くちづけ」という恋人を前提とする言葉があり、その点で拙著第五章で指摘した〈海と恋人〉のテーマを奏でていると言える。

朔太郎は、明治四四年二月、明治四五年(大正元年)六月、そして大正二年五月と、三年連続して、鎌倉の海に病氣療養中のエレナを訪ね、いずれも空しく帰っている。拙著第五章では、これらの鎌倉行の背景に、明治三八年夏の海水浴の体験があったという推論を展開した。朔太郎とエレナとの唯一の、そして朔太郎がエレナを思うとき常に回帰する原点ともいうべき、明治三八年夏の鎌倉の海での体験の、具体的な二人の交渉を考えるうえで「ありや二曲」がある程度参考になるように思われる。この作品が大正二年五月のエレナを訪ねる鎌倉行を契機として制作されたものであれば、ここに歌われた内容をエレナ

と結びつけて考えることにはじゅうぶんな理由があるからである。

明治三八年八月二〇日付の萩原栄次宛の絵はがきに、

夕月夜潮なる音に

あこがれて、君来る

途を浪に画きぬ。(萩原隆『若き日の萩原朔太郎』四九頁)

という短歌が記されており、『ソライロノハナ』『若きウエルテルの煩ひ』の章「ゆふすずみ」の節に、この歌と並べて、

海近き河辺に添ひし柳みち

月は二人の肩をすべりぬ(『全集』第一五卷、一四四頁)

という短歌が収録されている。

また、明治四四年二月に制作された、五年前の夏の海の体験を回想する歌物語「二月の海」に挿入された、

海ちかき瀧龍館のおぼしまに

立つは月の出待つににたれど(同、一九頁)

という短歌、さらに、大正三年末に制作されたと推定される、「遠き風景——幼なき日の少女子に」と題する制作年次不明の未定稿は、遠い少年の日に幼馴染みの少女とのあいだに海を背景とした懐かしい思い出が朔太郎の心の奥底にながく秘め隠されていたことを示すものであるが、その中に、

しらたへまさる波路のうたかた

月の出しほに(『全集』第三卷、三四七頁)

という一節がある。

これらの作品は拙著第五章において、朔太郎は明治三八年夏に鎌倉の海岸でエレナとともに数日を過ごしたのではないかという推定を展開したさいに引いたものであるが、そのいずれにおいても「月」が重要な役割を果たしていることが注意される。

このことを考え合わせて「ありや二曲」を読むと、そこに「流るゝ水をせき止めし／わかれの際の青き月の出」と、月が出現

するのは決して偶然ではあるまい。そして「そのくちづけのあとやさき」とあることは、鎌倉の夏の海の体験の具体的な内容を示すものとして注目される。

### 「浄罪」について

佐藤房義は『詩人萩原朔太郎』（一九七七年、双文社出版）において朔太郎の「浄罪」という観念について論じるさい、それを「救済を得るための祈りの行為」と単純に前提し、つじつまを合わせるために「日本の伝統的な考え方」という余分な概念を持ち込んだために、問題をことさら複雑にしてしまっているように思われる。

たしかに、明治四二年頃（推定）の父密蔵宛「書簡」に、

耶蘇教にては自殺をするものは地獄に墮ちて永劫硫黄の炎に苦しみをうくべしと説けり、仏教にては自殺を罪とせず、わが儒教にては却つてこれを善事となせり（『若き日の萩原朔太郎』八六頁）

とあるように、朔太郎はキリスト教の「自殺」にかんする考え方の違いに自覚的であり、かつ儒教や仏教などの伝統的な観念にも通じていたことが知られる。しかし、朔太郎は、以上のことから、「善と悪」が相対的なものであるという結論を導き出しているのであり、「天上縊死」を「日本の伝統的な考え方」と結びつけて考える根拠とすることはできない。

この点については、むしろ、木村幸雄の、つぎのような指摘は、「天上縊死」を解説するうえで、重要な手がかりを提供してくれるように思われる。

このイメージの特異さは、一種の衝撃性をともなっている。懺悔をつきつめた究極のイメージが、祈りの姿をとったままの縊死というものになったのである。すなわち、罪の

意識が、懺悔の涙をしたたらせ、浄罪を祈つて（天）を憧憬するというのは、宗教的意識のあらわれとみてよいだろう。しかし、神聖なものである「天上の松」に、罪深い首吊り死体をぶら下げるといふことは、それが祈りの姿をとっているにせよ、鋭い反宗教的なイロニーを感じさせ、グロテスクな幻想美の世界に転換し、変質してしまうものであるともいえよう。（『朔太郎・中也における〈空〉と〈天〉』『福島大学教育学部論集』一九八四年九月、二頁）

### 「草木姦淫」について

拙著第六章において「草木姦淫」の体験は、深酒、放蕩そして悔恨というそのその経過を見れば、しばしば朔太郎をおそった心理現象の典型であることが理解される」と指摘したが、これについて少し補足しておく。

朔太郎は、大正三年一月一日付の萩原栄次宛「書簡」において、つぎのように書いている。

パブでひどく酒を飲みました、何でも私は前後不覚になるまで酔つて夢のように酒場をとび出しました、同時に烈しい情慾を感じたので一軒の妙な飲食店へ飛びこみました、その家に一人の若い娘が居ました、私はいきなり娘を抱擁しました、そして可成長い接吻をあたまへました、（中略）草木姦淫の天罰を目のあたりに受けたのに相違ないといふことを悟りました、病気は益々重くなります、そのみならず一種の変調な軽い発熱が連続します、私ははつと思ひ心底から神に許しを乞ひました、（『若き日の萩原朔太郎』一九五〇七頁）

ここに描写された「草木姦淫」の経緯は、たとえば、大正三年二月六日の「日記」に見える、

例の病気が今夜は特に烈しい。Suicide について考へた。

(中略) Letzte Nacht の記憶がしばしば繰り返されること  
は死よりも苦痛である(『全集』第一五巻、一二七頁)

という体験と共通する点が多い。「日記」によれば、この前夜、  
朔太郎は遊郭に行つて「BERINKEN……」している。深酒と放  
蕩がかかわっている点で「草木姦淫」の体験と共通している。  
また、大正四年二月一六日付北原白秋宛「書簡」には、以下  
のようにある。

おとゝひ大酒をしたのでれいの病気が(神経系統の)出た  
のです、(中略)肉行のあとで笑つたうす白い女の唇や酔中  
に発した自分の醜悪な行為や言語などが言ひがたい恐しい  
記憶ではつきりと視えたり聴こえたりするので、その度  
に神経が裂けるやうな恐ろしい苦痛をする(『全集』第一三巻、  
九〇頁)

これも「大酒」と「肉行」すなわち深酒と放蕩がかかわつて  
いる点で、さきの「草木姦淫」の体験と共通する点が多い。

さらにさかのぼれば、明治四二年制作の「宿醉」における、  
しかしがに昨宵の現に  
狂ひしよただ接吻ののえまほしく  
肉ふるはせて抱きしは

我が手なり、脣に臭ぞ残る

(中略)

ああ悔恨は死を迫る(『全集』第三巻、二二三〜四頁)  
という体験なども、深酒と放蕩という点において、「草木姦淫」  
の原型的なものであるといえる。

このように「草木姦淫」はなにか特別なものではなく、朔太  
郎の生活において、しばしば生じた現象の一つであつたとい  
うことができる。

### 「浄罪詩篇」の構図

拙著第五章の註(9)において、「純銀の賽」のうちに、エ  
レナへの激しい愛情がかくされていることを示唆したが、こ  
で少し補足しておきたい。

『地上巡礼』大正三年一〇月号に掲載された「純銀の賽」の  
草稿と考えられる、未発表作品「坑夫の歌」につきのようにあ  
る。

えれなよ

〈ああ〉わが賽はすでに投げられ

そのするどさに〈肢体は〉《やぶれ》きずつき

〈額は〉足はきずつき

〈ああ〉瞳は光にめしひ

〈ああはや〉床に晶玉やぶれ(『全集』第三巻、四三三頁)

ここに、〈疾患〉のテーマにかかわる「やぶれ」「きずつき」

「めしひ」などの語句がはやくも見えている。また、これが書

かれた原稿用紙の下欄には、作品から〈疾患〉のテーマにかか  
わる部分だけを取りだしたかのように、つぎのような言葉が記  
されている。

〈えれなよ

瞳は光にめしひ

そのするどさに足《やぶれ》はきずつき

床に晶玉やぶれて

見よいま空〈上〉より賽は〈高く〉なげられ、

えれなよ

ああわが賽はいたく投げられ

そのするどさに瞳はめしひ

〈《足》肉やぶれ〉額〈きずつき〉やぶれ

床に晶玉やぶれつれども

はやわがトバクは風に流れて

さかづきはちちと青空に鳴りもわたれり、(同)

「賽」Ⅱサイコロ、「緑卓」Ⅱ麻雀、「ハートのA」Ⅱトランプなど、「純銀の賽」に横溢するギャンブルのイメージがエレナに対する一か八かの朔太郎の絶望的な思いを反映していることは、すでに拙著において指摘したが、単にそれだけではなく、「疾患」のテーマそのものが、なんらかの形でエレナへの恋情と結びついていることをこのことは予測させる。

「純銀の賽」には、末尾に「——八月三十一日——」の日付があり、「坑夫の歌」はその草稿であるから、その日付までには執筆されていたと考えることができる。

「やぶれ」「きずつき」「めしひ」などの語句をともなう「疾患」のテーマは、はじめ、「一九一四、八、三」の日付を持つ「感傷の手」(『詩歌』大正三年九月)に「いんさんとして土地を掘る」(『全集』第一巻、三二頁)手として萌芽し、つづいて「一九一四、八、二〇」の日付を持つ「墓参」(『異端』大正四年一月)において「かゞやく白きらうまちずむの屍體の手」(『全集』第一巻、三二頁)として発展し、さらに「磨かれたる金属の手」(『詩歌』大正三年一月)において成熟した表現を獲得することになる。

「純銀の賽」は、こうした一連の動きと平行して制作されたといえることができる。従って「疾患」すなわち朔太郎の身体をさいなむ激しい痛みのうちには、故郷に対するやりきれない思いとともに、自らの思いがエレナに届かないという苦しみも含まれていたと推測することができる。

「純銀の賽」の草稿「坑夫の歌」にかんして、もう一つ指摘しておきたいことがある。これは拙著第五章註(10)においてすでに指摘したことであるが、そこに「疾患」のテーマを示す言葉と並んで、

そのするどさに足《やぶれ》はきずつき

床は晶玉やぶれて

あるいは、

《足》肉やぶれ額(きずつき)やぶれ

床に晶玉やぶれつれども

などと、床の上で「晶玉」が破れるという表現が見えることである。(『全集』第三巻、四三三頁)これは、『地上巡礼』大正三年九月号所載の「殺人事件」の、

床は晶玉。

ゆびとゆびとのあひだから、

まつさをの血が流れて居る、(『全集』第一巻、三三頁)

という部分と照応している。「殺人事件」は「感傷の手」とほぼ同時期に制作されたと推定される。

従来、「殺人事件」は、このころ朔太郎が浅草で見た探偵映画「ジゴマ」に題材をえたものであるという指摘がなされてきたが、それとは別に、制作年次も近い「坑夫の歌」を参照するならば、そこに、「疾患」のモチーフが深くかかわっていたことは疑いなくろう。

#### 全集のイドラについて

従来の研究において、『全集』における「未発表詩篇」「草稿詩篇」などの区別が実体化され、そこになんらかの意味があるかのように使用される傾きが見える。しかし、本来、決定稿に至る過程において生みだされたものは、草稿も、未定稿も、朔太郎の思索の展開をたどるうえで等価であり、両者を区別する必要性はまったくない。その意味で拙著においても、『全集』における「未発表詩篇」にも、他の作品の「草稿」とすべき作品が数多く含まれていることはしばしば指摘した。

同じく、残された膨大なテキストを、書物というスタイルに

収録するときには、頁に従ってそれを配列することが是非とも必要になるが、その配列がなにか権威あるもののような意味を担ってしまうのも一種の錯誤である。

全集のスタイルが研究者の眼そのものを制限してしまうこと、これを「全集のイドラ」と呼ぶ。

### 「魔法使ひ」について

「魔法使ひ」の一節に、

「僕あ木つ株にされちやつたときのことを考へると、悲しくなつてたまらないんだ。

さうなつたら、僕はもう一生だれとも口をきくことはできないんだ。

それなのに、まいにちあの百姓たちがきちやあ、僕のあたまの上で薪だつぽを割るんだ。あいつらはきつと力いっばい、斧で僕の脳天をぶんなぐるにちがひない。あんな頑丈な腕でぐわんぐわんやられちや、僕とてもたまりやしないんだ。

いくら僕がいつしよけんめいで『痛いよう。痛いよう。』と泣いたつてそいつらにはきこえやしなないんだ。いくら僕がそいつらに『こりや僕の頭なんです。』『木つ株ぢやないんです。』と言つたつてだれにも解りやしなないんだ。『全集』第五卷三八三〜四頁)

という部分がある。これは、詩的散文「言はなければならぬ事」(『詩歌』大正四年五月)の、

私の神経はむぐらもちのやうにだんだん深く地面の下へもぐりこむ。不幸にして私の肢体の一部が地面の上に残つて居るとき、不注意な園丁がきて、それを力まかせに張り飛ばすのである。無神経な男の眼には木の根つ株かなんかの

やうに見えたのである。しかし私の張りさけるやうな苦痛の絶叫をたれ一人として聞いてくれたものは此の地上にない。(『全集』第三卷、一八六頁)

という部分と深い関連がある。

また、制作年次不明の未定稿「蛙料理」の、

わたしの眠つてゐるあひだに、

わたしの頭のうへの地面を通行人がふみつけて行つた(同

第三卷、三九五頁)

という部分とも関係がある。

ここには、休筆期間においても、朔太郎が、いつかんして思索を継続し作品の制作に意欲的であつたことの証拠がある。

### 註

(1) ただし、「南の海へ行きます」の「れいの背広」については、『詩歌』大正三年六月号に掲載された「緑蔭倶楽部」に見える「緑蔭倶楽部の行楽の／＼その背広はいちやうにうす青く」(同、第一卷、三三四頁)が本歌であるという可能性も否定することはできない。

(2) 拙著初版において、坂根氏の名前を誤記したことは、氏自身にも指摘を受け、第三刷において訂正させていただいた。ここでお詫び申し上げます。

(3) 朔太郎が前橋中学校卒業までを「少年時代」と称していたことについては、拙著第四章を参照。

(4) 坂根の朔太郎論は、『萩原朔太郎——詩の光芒——』(一九九七年、溪水社)にまとめられた。

(5) 久保忠夫が明らかにした。

(6) 「全集のイドラ」については『圖書新聞』二〇〇四年七月三日号所載「渡辺和靖氏に聞く『保田與重郎研究』一九三〇年代の時代精神 保田與重郎の思想形成を跡づける」のなかでも触れているので参照されたい。